

■ 编著：杨风莲 高春荣

大学日语课外衔接阅读

高级篇



高级篇

编著：杨凤莲 高春荣



天津大学出版社

TIANJIN UNIVERSITY PRESS

大学日语快速入门

图书在版编目(CIP)数据

大学日语课外衔接阅读. 高级篇/杨凤莲, 高春荣编著.
—天津: 天津大学出版社, 2009. 4
ISBN 978-7-5618-2972-1

I. 大… II. ①杨… ②高… III. ①日语—阅读教学—高等学校—自学参考资料 IV. H369. 4

中国版本图书馆CIP数据核字(2009)第041097号

高春荣 杨凤莲 编著

出版发行	天津大学出版社
出版人	杨欢
地址	天津市卫津路92号天津大学内(邮编:300072)
电话	发行部:022-27403647 邮购部:022-27402742
印刷	廊坊市长虹印刷有限公司
经销	全国各地新华书店
开本	185mm×260mm
印张	10.5
字数	350千
版次	2009年4月第1版
印次	2009年4月第1次
印数	1-3000
定价	45.00元(共三册)

凡购本书如有缺页、倒页、脱页等质量问题, 烦请向我社发行部门联系调换

版权所有 侵权必究

总序

众所周知，学好日语绝非易事，尤其是要想提高日语阅读水平极不容易。大多数日语专业的大学生都知道，娴熟的日语阅读能力绝非一朝一夕就能练就的。这是因为要进行有效的日语阅读理解不仅要求我们拥有很大的词汇量，还要求我们拥有坚实的语言功底、广泛的基础知识和颇强的理解能力。这些都需要学生平时大量地阅读文章来积累知识，扩大知识面。

日本语能力等级考试成绩的高低，很大程度上标志着大学生日语水平的高低。而阅读理解正是日语能力等级考试的重要组成部分，也是检验考生综合能力的的一个重要方面。要想在日语能力考试中取得优异的成绩，就一定要具备优异的日语阅读水平，而要提高日语阅读水平，就必须大量阅读和进行有针对性的训练。大量阅读是一个由量变到质变的过程，必然要消耗大量的时间和精力，而且由于没有经过系统化的训练，进步也会比较缓慢。而针对性训练则不然，它是通过阅读少量但具有一定代表性的文章，使日语阅读能力得到较快速提高的一种方法，它胜在可以使学习者在一段时间内得到较大提升。如果说第一种方法是用一点点堆积成山的话，那么这套书就是先给读者搭一幢大楼的框架，然后再向里慢慢填充水泥砖块的过程。与前一种方法相比，这个方法更为方便、有效，受众面更广，也更能为广大日语学习者所接受。本套书就是秉承此种思想编写而成，全套书共分三册，共150篇具有代表性的文章，由浅入深，题材广泛，内容新颖，融知识性、趣味性、科学性于一炉，可以说，本书是一本集学术性、可读性、实用性于一体的好书，旨在帮助广大日语爱好者卓有成效地提高日语阅读水平。

由于编者水平有限，在编写过程中出现的诸多疏漏及不当之处恳请有关专家和读者批评指正。

编者

目次

1、取材学	1	25、九月の空	72
2、対話する人間	5	26、続深代惇郎の天声人語	76
3、日本語は京の秋空	7	27、詩酒おばえ書き	78
4、空間意識論	10	28、夜空の赤い灯	81
5、おせっかい	14	29、晩年の父	85
6、地の音	17	30、手のうごきと脳のはたらき (1)	88
7、銀の匙 (1)	20	31、手のうごきと脳のはたらき (2)	91
8、銀の匙 (2)	23	32、佐佐木幸綱の文章による	94
9、裏裏藪の生き物たち	26	33、大事なことは、ボランティアで教 わった	97
10、木馬の騎手	30	34、日常性の社会学	101
11、冬の蠅	32	35、昭和五十四年十一月三日の社説	105
12、男どき女どき	35	36、使うことを考える	108
13、内山節の文章による	38	37、信号	112
14、井上後の文章による	40	38、ハタハタ	114
15、水の旅	42	39、湧き水	117
16、日本および日本人	44	40、夏の葬列	120
17、考えるよろこび	47	41、長男の出家	122
18、泥の河	50	42、風の中の瞳	126
19、小説の作り方	53	43、時の筏	129
20、文学入門	55	44、閑話一滴	132
21、カワウソ	58	45、千住真理子の文章より	134
22、現代人生論	62	46、黄色い双眼鏡	138
23、『私』のいる文章	65	47、ある冬のかたすみで	142
24、日本のことげところ	68	答案	146

1

取材学

(第一段落)

● 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ひとの話をきいて学ぶ、という方法——それは一般に「耳学問」という名で呼ばれている。そして、このことばは、あまりいいひびきを持っていない。どうせ耳学問ですから、などと言いながら頭をかいて、いささか①弁解がましいものの言い方をするのが、われわれの一般的習慣というものだ。学問というものの本筋は、書物を読むことにあるので、耳で聞いた知識などというのは、読書にくらべると格が下だ、という思い込みがそこにはある。

(第一段落)

しかし、わたしなど、みずからのこれまでの勉強をふり返ってみると、知識の大部分は耳学問によって仕入れてきたような気がするのである。しあわせなことに、わたしは、日本でも外国でも、すぐれた先生や友人にめぐまれてきた。立派な著書を何冊も書かれた先生たちからは、もちろん書物をつづじて多くを教えられたが、それでも、率直に言って実際にお目にかかって話を耳できいたときのほうがずっと啓発される

ことが多かった、というのがわたしの実感なのである。文学の世界から学ぶだけが取材なのではない。本には書かれていないすばらしい情報が、同時代を生きている人々の頭のなかにいっぱい用意されているのである。

(第二段落)

ひとの話をきく、というのはいいいことだ。どんな人と話をしても、かならず勉強になる。人生や社会について視野をひろげていくためにも、たくさんの方の話をきくことがのぞましい。しかし、ひとの話をきくというのはレコードやテープを機械にかけてその音声をきく、ということとは違うのである。レコードやテープは、スイッチを入れさえすれば、ひとりでにスピーカーから音が流れてくる。しかし、生身の人間の話は、スイッチを入れたからきこえてくる、というわけのものではない。

(第三段落)

どうしたらよいのか。常識でわかることだが、ひとを訪ねたら、口をひらき問いを発しなければならぬ。問いがあつて、はじめて答えが得られる。つまり、話をきくということとは問うということなのである。問いがなければ、なにごとかさっぱりわからない。そして、問いと答えの連続によって会話というものが進行する。ひとをたずねて取材する能力は、別

(第四段落)

(第五段落)

(加藤秀俊「取材学」はり)

朗朗……声や音などが、まくひびく様子。

(ア)私はこの本に多くのことを教えられた。

(ウ) 先生は、黙って大きくうなずかれた。

(エ) 努力しだいで、良い結果を得られる。

[illegible]

(ア)前半では第二段落の筆者の体験をまとめて、後半ではそれを否定する第四段落の意見を導き出す手がかりを示している。

(ウ)前半では第二段落の筆者の体験をまとめて、後半ではそれを発展させた第四段落の意見を導き出す手がかりを示している。

「耳學問」、「取材」、「問い」の三語を用いて六十字以

2

対話する人間

● 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「心の時代」ということが最近よく言われるようになった。これはいったいどういう意味だろうか。一般的になんとなく感じられていることとしては、現在は物質的な豊かさは急増加してきたが、考えてみると、心という点では非常に貧しくなってきた。だから、心を大切にすることに努めねばならぬ時代だ、ということになるだろう。そして、昔はもつと心を大切にしていたのに、現在は心の問題を忘れたり、心を軽視する傾向が強い、^①と嘆く人も多い。 果たして本当にそうだろうか。

たとえば、昔は家族の間に心の触れ合いがあつたが、今はなくなつてしまつたと嘆く人がいる。確かにその人の生き方を見ていると、子ども時代は田舎^{いなか}で育ち、昔の日本式の家で、家族がいつも一緒になつて生きてきた、という感じだったのに、都会に出てきてマンションに住み、妻と一人の子どもと住んでいるが、それぞれが個室に引き込んだりして、家族の

接触は急激に薄れている。確かに心の触れ合いは少なくなっている。しかし、ここで非常に大切なことは、昔の生き方をやめ、今のような生き方を望んだのも、この人の「心」であるという事実である。昔はよかったと嘆くのも、この人の心だが、現代の生き方を選んだのもこの人の心である。ここに心の問題の難しさがある。それは一筋縄では簡単に答えを引き出してこれぬことなのだ。

現代に生きる大半の日本人の「心」は物質的豊かさを望み、努力をし、それは大分成功したと言つていいだろう。そのことを忘れてしまつて、「心の時代」だから物質的なことを蔑視^{べつし}するとしたら、あるいは、昔はよかったと嘆いてばかりいるとしたら、それは全くばかげたことと言わねばならない。何も現代になつて、人間の心が急に貧しくなつたなどということはないのだ。要は^②急激に豊かになつた物に見合うだけの心の在り方、という点で配慮が足りなかつたのではなからうか。物質的急成長にふさわしい心の成長という点で、後れを取っているとでも言うべきであらうか。

「心の時代」だから物はどうでもいいとか、経済や自然科学の成長をとにかく言うのはおかしいのではないだろうか。

物か心かと二者択一的に考え、心を取って物を捨てる式の「心の時代」ではなく、物も心もどちらも大切であるが、物の方が目に見え過ぎるので、目に見えない方を強調するために「心の時代」というのだ、と考える方がはるかに妥当である。

(河合隼雄「対話する人間」より)

(1) にあてはまることを次の中から選び、記号で答えよ。

(ア) または

(イ) だから

(ウ) しかし

(エ) そして

(2) 線①「と嘆く」とあるが、嘆く内容はどこからどこまでか。その部分の始めと終わりを、文章中から五字ずつ抜き出して書け。ただし、句読点は一字に数えない。

始め

終わり

(3) 線②「急激に豊かになった物に見合うだけの心の在り

方」と同じ字意味のことを述べている部分を、文章から抜き出して書け。

(4) この文章の要旨として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

(ア) 物質的に豊かになったが、昔に比べて心は非常に貧しくなったので、心を大切にしていく必要がある。

(イ) 物質的な豊かさを望むあまり心の触れ合いを忘れているので、あたたかい家族関係を築いていく必要がある。

(ウ) 最近、物質的に急成長をとげたので、物の豊かさを取らず心の成長を考えることが大切である。

(エ) 物はどうでもいいのではなく、物質的な豊かさとして合う心の在り方を、求めることが大切である。

3 日本語は京の秋空

● 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

常識という言葉は辞書を開いて調べると、「一般の人が持っている、また、持つべき知識・理解力・判断力」といった解釈をしている。ただ、私個人の解釈を言うなら「社会生活を営む上で、当然知っていると予想される知識」となるかもしれない。この「当然知っていると予想される」というところがこの言葉の難しいところだ。つまり、個人個人の考え方や生きてきた環境が違えば、この「当然知っていると予想される」内容も少なからず違ってきてしまうからだ。

筆者の父は東北の岩手県出身、母は生粋きっすいの江戸っ子だった。

① この二人はしょっちゅう意見が衝突きつしていた。それは正月の雑煮さけに何を入れるかといったAから始まっていた。父は絶対さけ鮭さけの子を入れなくては正月のめでたい気分は味わえないと言ひ、母はお雑煮にそんな生臭いものを入れるなんて聞いたことがないと反論する。つまり、父にとっては雑煮に鮭の子を入れるということが「常識」なのであり、母にとって

は入れないことが「常識」なのである。相手も自分と同じ考え方をするはずだと予想し、それが外れると、「あの人は常識がない」という言い方をする。つまり、「常識」とは大変個人的な考え方の尺度だと言えると思う。

「世間」という言葉がある。これを英語に訳す world (ワールド) になるが、「世界」と「世間」はちよつと違う。「社会」とも似ているが、受ける感じはやはり違う。土居健郎どいたけお氏の著した「甘えの構造」によると、日本人の生活は一番内側に身内の世界があり、これは遠慮がいらぬ。その外側に世間があり、そこでは窮屈な心づかいをすべきである。そして、その外側にまったく遠慮のいらぬ他人の世界があると考えられてきたのだそう。日本人にとって「常識」が大切になるのは、この「世間」の世界である。ここでは身内の世界で学んだ「常識」がいろいろな形で試されることになる。②

「世間様に笑われる」とか、「世間に出て恥をかく」というような言葉はいかにも日本的だ。しかし、この「世間」から抜け出して、まったくBにいつてしまえば、「常識」はそれほど大切ではないという考え方だが、問題はある。日本人は公徳心がないとよく言われる。公園や道路に空きカンを投げ捨てたりするのは、この辺に原因がありそうだ。

「C」などともいう。誰も知^{だれ}っている人がいなければ、何をしてもいいというわけだ。

欧米にも我々のような社会生活を営む上での「常識」というのは当然ある。そして、それは日本人の「常識」としばしば食い違^{ちが}うのも面白い。たとえば、筆者があるアメリカ人に大変世話になって、その次にその人の妹に会った。彼にはとても世話になったのでよろしく伝えて下さいと頼んだ。日本人なら当たり前のことだ。ところが、その妹は、私と兄とは別々の人間で関係ない。そのようなことを頼まれるのは迷惑なことだと言うのでびつくりした。このアメリカ人にとってはそのことを言われるのは、常識外れということらしい。私はつくづく難しいものだと思った。「郷に入れば郷に従え」という。つまり、「常識」というのは、そのくらい地域や家庭によつて違うということだ。逆にいえば、「常識」とは必ずしも普遍的な知識ではなく、また合理的で優れたルールというわけでもないのである。

次の文章を讀み、(金田一春彦「日本語は京の秋空」より)

(1) —線①「この二人はしよっちゅう意見が衝突していた」とあるが、しよっちゅう意見が衝突していたのは、「この

二人」の「常識」に違いがあつたからである。その「常識」の違いは、何の違いによつて生じると筆者は考えているか。「の違い」に続くように、第一段落の中から抜き出して書け。

(2) にあてはまることばを次の中から選び、記号で答えよ。

(ア) ささいなこと (イ) けなげなこと

(ウ) みごとなこと (エ) すなおなこと

(3) —線②「『世間様に笑われる』とか、『世間に出て恥をかく』というような言葉はいかにも日本的だ。」とあるが、「世間様に笑われる」とか、「世間に出て恥をかく」というような「世間」を氣にした言葉が、なぜ日本的だと筆者は言うのか。三十字以上、四十字以内で書け。

40	30								

あ	う	ち	の	な
---	---	---	---	---

⑤ 二、三枚の古紙を、代用紙で

[illegible]

4 空間意識論

● 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① この文章の要旨として最も適当なものを選びなさい。

一 日本最初の都が飛鳥地方に誕生し、その土地が盆地であつたといふことは、日本文化を考えるうえで、一つの重要な鍵ではないかと思われる。ときに難波や滋賀に都が移るこ
とがあつても、長くは続かないで、大和朝廷は繰り返しこの盆地のなかへ帰つて来る。有名な香貝山をはじめ、大和三山によせた歌や神話はおびただしくあり、飛鳥は日本の詩人にとって長く心のふるさととなつた。① さして要害堅固とも思えない狭い空間に、古代の日本人は不思議に心理的な安定を覚えたようである。

二 いわば飛鳥盆地は、そこに住む人にとって心理的な意味での城郭であり、それがあつた限り、人間はあらためて外界に対して自己を閉じる必要がなかつたのであろう。そのなかで日本人にとって都市や建築は不動の外壁であるよりも、むしろ身に着けて動きまわる衣装のようなものではなかつたであらうか。

三 さまざまな建築や都市の形を決めるものとして、人間にはいくつかの違った空間意識の型があるといわれている。空間をどのように感じるかは文化によつて違つていて、そのことがそれぞれの都市や建築の形にあらわれる。単なる気候や資材の条件以上に、住み方の文化を決定するものは、人間が外界の空間についていただく基本的なイメージなのである。

四 たとえば、ドイツのプロベニウスという学者によると、アラブの砂漠の民族にとつて、自然は彼らの天幕のようにま
るく閉じた空間であつた。実際は無限に広がる砂漠の空間を、彼らはまるで大空に蓋をした閉鎖的な空間として感じとつた。たぶん、そう感じとらなければ無限の砂漠は不安を与えてるのであつて、彼らは閉鎖的な空間のイメージを作つてようやく安心することができた。そして、その意識を反映するよう
に、② アラブの建築は中庭を内に作つて、現実には閉鎖的な空間をこしらえているという。

五 それに対して、いわゆる西欧の建築は、同じ無限の空間を意識しながらそれを恐れていない。庭は建物の外にめぐらされて、自然の開放的な空間につながっている。アラブの建築が暗く内向的であるとすれば、③ これは快活に外向的であつて、上にのびあがり、横に広がる力にあふれて

いる。フロベニウスはこの二種類の建築に、広く④人間精神の二つの基本的な形を見い出そうとしたのである。

六 たしかに西欧のこのような空間意識は、建築のみならず、文化のさまざまな特色のなかにあらわれているようにみえる。無限の空間に対決し、どこまでも拡大しようとする精神が、やがて冒険を愛し、海を支配し、一つのイデオロギー（思想）を世界に広める、あの西欧的人間の衝動につながったのかもしれない。

七 たが、このフロベニウスの仮説が正しいとして、日本人の空間意識は二つのどちらにも属さない独特なものだといえる。盆地の地形は自然に閉じているのであるから、それを基本的な生活の場所とする人間には、無限の空間は存在しない。勇敢に外へ拡がる必要もなければ、あらためて閉鎖的な空間を作りあげる必要もない。⑤母胎のような自然のなかに包まれて、安んじて建築は流動的で、はかない形に作ることができるだろう。

八 無限の空間に脅かされていれば、いずれにせよ、建築や都市は自分で自分をささえなければならぬ。アラブふうの建築は、重くどっしりと土に根をおろし、西欧ふうの建築は、

爆発的な力をひめて空にそびえている。

九 それらと比べると、日本の建築は美しくはあっても、なんと弱々しく見えることだろう。⑥明らかに、それは外の空間と対決したことのない建築であり、視覚的に自分で自分をささえる必要のない形なのである。

十 そういえば、千年の京の都も盆地であつたし、鎌倉や奥州の平泉も盆地であつた。文化的な意識のうえで、日本人は、盆地から盆地へ跳ぶ不連続の空間に生きてきたともいえる。そしてその最初の原型が、五世紀の飛鳥盆地にほかならないのである。

（山崎正和「空間意識論」より）

*一部省略等がある。

(1) 線①「さして」は、どのことばにかかるか。文章から一文節で抜き出して書け。

(2) 線②「アラブの建築は中庭を内に作って、現実には閉鎖的な空間をこしらえている」とあるが、フロベニウスによれば、アラブの建築で中庭を内に作るのは何のためということになるか。文章中のことばを用いて、四十五字以内で

